

石橋毅史さんに学ぶ

(音信不通 ⑱)

奈良 敏行



石橋さんが大阪・神戸でのお仕事のついでに、十二月十八日から一泊で鳥取市まで足を延ばしてくださいました。石橋さんは出版ジャーナリストで、現在連載中の「本屋がアジアをつなぐ」(東京新聞)が注目を集めている。出版業界紙「新文化」の元編集長で、本屋の動向を見守る取組みをつづけている。対象に寄り添う姿勢が鮮明で、わたしは「本屋の守護神」とあがめている。

十月末に地方・小出版流通センターの川上賢一さんがお見えになったとき、「こうしてお茶するのもこれが最後だね」と二人で交わしたのを耳にされ、案じてお訪ねくださいました。その心の優しさをうれしく思った。しかし、出版流

通の転変の中に身を置く二人の、エールのかわしい以外ではなかった。

「音信不通」を始めるとき、準備運動として、わたしは石橋さんの文章を原稿用紙百枚に書き写す決意をした。

「伝える文章」として、最高に完成していると思えたからだ。正確・平易・簡潔という文章作法の要求になつていられるお手本とみえた。でも、小冊子をスタートしてみると、お手本通りにいかなかった。

定有堂の棚づくりを思い起こした。「分かりやすい」棚でないのが定有堂の個性だ。一番の理由は、小さな本屋なので、棚を動的に保たねばならないからだ。石橋さんの「分かりやすい文章」を模倣できなかったのは、「音信不通」が千六百字で書くという制約を設けたからだ。そうした結果、気がついたのだが、文章に「飛躍」が多くなる。また、同根でもあるのだが、「言葉」を支えとして考えを紡ぐようになる。これは石橋さんの禁じ手とするところであつて、「伝える文章」の許さないところだ。

定有堂の棚は「分類」を嫌う。狭い店内で分類をきっちりやると、ガランとした雰囲気となる。でも本が雑然と肩を並べるだけでは、あまりに工夫のない本屋となる。そこで言葉で締める。棚のあちこちで「棚フリーズ」がささやきを交わす。……「記憶は重荷ですから……」「妙にわか

ってしまっただけじゃない」「好きなことだけして、小さく
なって、懐手して暮らせぬものか」「結果を左右できない
ことにコミットしない」「地図と土地とは違う」「存在を
遊戯に変える」「過剰反応をやめる」「存在は言葉に縛ら
れる」などだ。自分ではこの行為を「本のチャンク化」と
呼んでいる。人が知覚するときの「情報のまとめ」のこと
だ。「石橋さんの文章を書写したんですけど……」と言
訳したけど、こんな闇に囚われているわたしだった。

石橋さんと「服部珈琲工房」で話していると、「街の本
屋っていつ誰が言い始めたのだろうか？」と疑問がわいた。
ふと思いつ出したのだが、リクルートが刊行していた『AG
GRE(あぐれ)』という雑誌に、一九九五年から九六年
の終刊号まで「町の本屋という物語」という連載をして
いた。ここでは「町」だ。いまは「街」を使っている。町は
町内というように「つながり」を含む。街は街角というよ
うに風景的なものだ。本屋を動的に語るときに「まち」と
いう枕をつけたいのだが、どうも居心地がよくない。

ただ、わたしには明確な区切りがある。それは柴田信さ
んとの出会いだ。岩波ブックセンターは神保町という本
街の中心にある。この場所で「街の本屋」と柴田さんはい
う。町の本屋というのは「周辺」そして「古層的」な立ち
位置と自覚していたが、柴田さんの「街の本屋」という名

乗りは、わたしに衝撃だった。ナショナルチェーンは街の
本屋とはいわない。街の本屋には独立系という意味もあ
る。また个性的という見方もできる。身の丈の絞り方は
様々だが、自分の得意を凝縮し、「身の丈」を創出する。
「普通の本屋」とともに、これが柴田信さんの発見だ。

江戸文学に「長屋長者」というのがあった。大金を持っ
ているのに、一軒家に居を構えず長屋に暮らす男がいる。
「なぜこんな狭いところにいるんだ？」と問われ、「金持
ちは溢れているが、長屋に住む金持ちは希少価値だ」とい
う落ちだった。

石橋さんと共に敬愛する、柴田信さんの思い出が、おの
ずと話題を温めたのだった。

2017.12.22

(参考)

『AGGRE(あぐれ)』リクルート 1996